Vistas

KOBE COLLEGE NEWSLETTER

"Beauty Becomes a College"

39

2021•June

◉Published by KOBE COLLEGE

神戸女学院大学

◉〈新旧学長対談〉中野 敬一（神戸女学院大学 学長）斉藤 言子（神戸女学院大学 前学長）

生涯を支える学びを、提供し続けよう

神戸女学院で育まれ 心豊かに しなやかに 時を歩む

精神分析的心理療法の実践・研究・教育──5
子どもと家庭の厳しい現実を見据え
未来を守る心理援助の担い手を育てる
人間科学部 心理・行動科学科　若佐 美奈子 准教授

誰もが地域の中で安心して暮らせるように──9
──患者と取り巻く人々の"繋ぎ役"を担う──
精神保健福祉相談員　小西 佐和 さん

新型コロナウイルス感染拡大に
対応した授業運営について
健康・安全を最優先課題としながら、教育の質を保つ──11
副学長・教務部長　立石 浩一 教授

「音楽によるアウトリーチ」を発展させた民間企業との産学連携協定を締結──13
音楽学部　松浦 修 准教授

本学ウインドオーケストラが世界的作曲家の新譜・初演曲を含むファーストCDをリリース──14
音楽学部　松浦 修 准教授
八木澤 教司 専任講師
稲本 渡 専任講師

KCトピックス──15

●前学長
斉藤 言子――*SAITO Kotoko*

●学長
中野 敬一――*NAKANO Keiichi*

新旧学長対談

生涯を支える学びを、提供し続けよう

神戸女学院で育まれ 心豊かに しなやかに 時を歩む

2021年4月、新学長に中野敬一文学部総合文化学科教授が就任し、新体制がスタートした。
今号では、2期6年を務めた斉藤言子前学長と、バトンを受け取った中野学長が、
これまでの取り組みを振り返るとともに、コロナ禍の現況から、未来に向けた本学の課題と抱負を語り合った。

◉学長として大切にしたいこと

中野　2期6年という長きにわたって、私たちのリーダーとしてご尽力いただいたことを感謝申し上げます。

斉藤　2015年の就任時は、音楽学部から初めての学長ということで、試行錯誤の連続だったのを思い出します。振り返ると、本当に多くの方に支えていただきました。この場を借りて、言い尽くせない感謝の思いをみなさんにお伝えしたいと思います。

2期目に入ると、これから取り組むべきことがはっきりしてきました。各所のご意見も伺い、それをまとめて実現していこう、新しい窓を開けていこうとしていたところで、想定外の新型コロナの流行が起きました。私自身も大学も、世の中も、前向きな行動が停滞し、目の前の対応・対策に追われてしまいました。思い描いていた計画をいくつかやり残し、残念な思いはやはり少し残っていますが、コロナがなければ見えなかった、本学の弱点をも見直すこととなり、一丸となって乗り越えていっています。不測の事態に直面した時に皆の気持ち・行動が瞬時にまとまることは、本学の最大の強みだということを、再認識いたしました。

中野　未曾有の事態といえる新型コロナウイルス感染症は不明の事が多く、各所から様々な意見や要望が出され、緊急に対応すべきことが続きました。皆の気持ちをまとめていかれるのは大変であったと思います。また、斉藤先生だったから成し遂げられたことが、たくさんあったと感じています。たとえば、2018年にアメリカのサム・ヒューストン州立大学の教員・学生を招いて行った合同オペラ。ああいう大きなことを実現できたのも、斉藤先生の存在があったからこそだと思います。

コロナに限らず、常に的確な指示や決断が求められる立場にある学長として心がけておられたこと、大切にしておられたことがあれば、お聞かせください。

斉藤　まず、バランスを保ちながら常にフェアな視点で判断すること。その上で、各部門で責任を担っていただいている方々を信頼してお任せし、口を挟まず、最後までお任せする。万が一、立ち行かなかったときには、学長として介入する。その見極めを、自分の中ではいつも考えていました。

また、決定したこと、進行中のことであっても、一旦立ち止まって、引き返す勇気も必要ではないかということを、常に自問自答しておりました。

それから、明るくポジティブな雰囲気づくりで、どんな場面においても、それぞれが自分のなすべきことを気持ちよくなすことができるようにしたい、ということも心を配っていたことです。そしてもう一つ大切なこと、心身ともに健康であることです。

▲サム・ヒューストン州立大学との合同オペラ公演（2018年）

◉コロナによって問われた大学のあり方

中野　コロナ禍において、私たちは多くのことを問われました。少人数教育を行う本学は、面と向かって、学生に大切なものを伝え、それを共有し合ってきましたが、その機会を突然奪われてしまったと思います。

斉藤　近年は人間力を高める上で、人と人とのコミュニケーションがいちばん大事だと、教育の面でも声高に言われていましたのに、コロナ禍が起きた途端に、それができなくなってしまいました。

このように既存の価値観が崩れ、何が起きるかわからない状況においては、真に優しく、強く、予期せぬ出来事にもしなやかに対応できる人間力を備えた人が必要とされます。そのような、女性を育てることを、本学はずっと目指してきました。はからずも、私たちの教育は間違っていなかったんだと、コロナ禍の中で確信することになったと思います。

中野　おっしゃる通りだと思います。そのような人間力を育むために本学は「キリスト教主義」と「国際理解の精神」、「リベラルアーツ教育」を教育の柱としてきました。学生には培った広い視野と知性や感性によって、それぞれが置かれた場所で自らの役割を感知し、力を発揮できることを期待して教育を続けてきました。

私たちはそれがどんな時代においても、求められている教育であると信じています。先行きが不透明であればあるほど必要な教育だと思います。ただし、この教育をどこまで踏ん張って続けることができるかが、大きな課題です。

世の中の多くの人たちも、しなやかな人間力こそ大切だとわかっていながらも、やはり職業に直結する実学的な学びに関心が向く。社会が不安定になれば、ますますそういう気持ちが湧いてくるでしょう。けれども、それで生きる力、人としての確かな基礎を築くことができるのか、心配になります。どこかに就職できたらそれで終わりということではなく、その人の生涯に責任を持つことが、一人ひとりの人生に関わる立場にある教育者の役割ではないでしょうか。

自分のためだけではなく、他者のために自分を用いていく、隣人の喜びを自分の喜びとする女性を、本学は世に送り出してきましたし、これからも続けていくことが私たちの使命だと思っています。

これからの時代、本当に何が起こるかわかりません。コロナだって、1年前には誰も予想していなかったことです。AI全盛時代においては、人間とは何かが問われてきます。既存の仕事は失われていき、新たに何が生まれてくるかもわからない。今持っている知識が本当に役に立つのかを、疑ってかからないといけない。そう考えると、専門性を深めながら、さらに幅広い分野を横断的に学び、多様な視点を得ることができるリベラルアーツ教育がますます求められることでしょう。私たちは時代の先を見据えているのです。

斉藤　私立大学連盟の学長会議で、「企業のニーズに応じた教育をというけれど、世の中のめまぐるしい変化の中で方向転換を繰り返す企業も多い。その会社でその仕事をしたいと目指していた若者はどうなるのでしょうか？　結局、状況を受け止め臨機応変に対応できる柔軟性と精神力と頭の柔らかさが評価されると思います」と発言したことがあります。今ここが最先端って言ったところで、展開の早いこの時代に、数年経ったらもう古くなってしまう。だから、日本の大学教育のあり方を見直さないといけないんです。

◉発信力が課題。価値をどう伝える

斉藤　本学がよい教育をしていることは、中に入ればわかります。卒業すればもっとわかります。でも、入学していただかないと、なかなか知っていただくことができないとはがゆい思いを感じております。

中野　本学の教育の成果を、どうやって可視化できるかが課題だと思います。もちろん何をもって教育成果と言えるのかは議論の余地があります。卒業して何十年も経て、その教育が結実することもあります。学生時代に得たものが無意識のうちに各々の人生に形作られることもあるでしょう。つまり成果の説明は困難なことでもあります。けれども本学の教育をアピールしていくためには、可視化の作業も重要であると思います。

卒業生の具体的な成果を調査することも一つでしょう。それを通じて得られた内容を広く示して、受験生だけではなく、地域の方々にも、あるいは国際的にも、もっといろんな人たちに本学を知ってもらい、ここで学びたいと思うファンを増やしていきたいですね。

また、今後はより幅広い世代に教育の場を提供できたらと思っています。少子化は続き、18歳人口は更に減っていくでしょう。大学進学者の分母が減るわけですから、どの大学もダウンサイジングを考えていかないといけない。人生が長くなり、人生設計も変わってきました。学び直したいという社会人はたくさんいます。リタイアした後でも勉強したい人も増えています。そういう方々の受け皿として本学が機能していけばと思っています。

斉藤　コロナ禍の中で、今まであまり必要としてこなかった人、また苦手意識のあった人も、オンラインのスキルを手にしました。オンラインならば、年齢も国籍も障害の有無も越えて、大学は学びの可能性をもっと広げていけると思っています。これは、これから中野先生に取り組んでいただくことですね。

◉創立150周年へ、継承と変革

斉藤　2025年10月には創立150周年を迎えます。そこに向けて、どう繋げていくかも、中野先生の大きなお仕事になるんじゃないかなと思っています。

中野　より優れた学習環境を整えるためにキャンパスグランドデザインの話し合いを進めています。本学の新たな魅力にしていきたいと思っています。

建学の精神に立った使命の継承も重要となります。

自分のためだけではなく、他者のために自分を用いていく、隣人の喜びを自分の喜びとする女性を、本学は世に送り出してきましたし、これからも続けていくことが私たちの使命だと思っています。また、そういう人たちを輩出できる大学は、日本においては貴重な存在です。こういう大学の存在がなくなってしまうなら、この国の未来はないと思っています。

本学の価値感を共有してくださる方々に本学の門を叩いていただきたい。また、在学生のみなさんには、せっかく本学の良き伝統の中にあるわけですから、その伝統を継承し、社会に出て、人生の中で存分に発揮していただきたい。

既存の価値観が崩れ、何が起きるかわからない状況においては、真に優しく、強く、予期せぬ出来事にもしなやかに対応できる人間力を備えた人が必要とされます。

◉揺るぎない教育理念

中野　うちは良い学校ですよね。本当にそう思うんです。

斉藤　私も退任にあたり、しみじみとそう思います。

中野　なぜ良いかといえば、学生を大切に思い、丁寧に関わろうとする教職員が多い。文字通り、目の届く少人数教育を実践しています。さらに自然に恵まれ、ヴォーリズの建築があるこの素晴らしい環境。ここの空気、時間の流れは、他とは異なるものがある。じっくりと学ぶことができる空間、人と出会いを楽しむ空間がある。これらは先人たちの努力と協力と祈りによって与えられたのです。自分たちの生きる時代のみならず、未来で学ぶ学生のために良いものを提供してくださった。その精神がここには生きている。ここを守り続けていく、そのことだけです、本当に私がすべきことは。素晴らしい学び舎だからずっと残したい。もっと多くの人に知ってもらいたい。もっと多くの人を迎えたい。それに尽きます。

斉藤　伝統を守るためには、同時に変革を実行していかなくてはなりません。何を引き継ぎ、何を変えていくか。時代の変化に先走って飛びついても、とんでもないことになる場合もあります。かといって、みんなと一緒に流行を追いかけていったら、追いついたときにはもう流行遅れになってしまう。先見の明が大事です。その点、中野先生には安心してお任せできると信じています。

先生はチャプレンですから、他では聞く機会のない、学生の声を聞くこともあるのではないですか？

中野　他の先生方に比べて、自分の学科以外の学生さんたちと接する機会が多いと思います。キリスト教の授業では、悩みや、心が弱い状態を素直に打ち明けてくれる学生もいます。これは、私がチャプレンという立場にあるからだと思います。一人ひとりの学生の声を、これからも大切に聴き取っていきたいと思っています。

斉藤先生は同窓会、卒業生の方との繋がりも大事にしてくださっていますね。150周年記念事業は現役の者だけでやってもうまくいかない、同窓生の方の協力がないと進まないということがあります。先生の人脈におすがりすることも出てくると思います。ご助力のほど、改めてお願いします。

斉藤　喜んで。これから、私は神戸女学院大学の学生、教職員の皆様、そしてその代表である中野学長の強力な応援団になりたいと思っています。

■**中野敬一**（なかの・けいいち）――神戸女学院大学学長。文学部総合文化学科教授。学院チャプレン。1988年同志社大学神学部卒。1990年同大学院神学研究科博士課程前期修了。2005年Pacific School of Religion (Berkley, California)修了。2006年頌栄短期大学 准教授。2010年本学に准教授として着任。2015年教授。2021年4月より学長。

■**斉藤言子**（さいとう・ことこ）――神戸女学院大学名誉教授。前神戸女学院大学学長（2015年4月～2021年3月）。神戸女学院大学音楽学部卒。同研究生修了。イタリア声楽コンコルソ優勝、ミラノ大賞受賞しミラノヴェルディ音楽院に留学。南カリフォルニア大学に客員研究員として留学。国際コンクール上位入選多数。イタリア、日本、アメリカでリサイタルをはじめ、オペラ主演多数。神戸女学院大学音楽学部教授（1999～2021）。各種コンクールで審査員を務める。関西二期会副理事長、日本演奏家連盟、神戸音楽家協会、宝塚演奏連盟会員。

精神分析的心理療法の実践・研究・教育

◉ 子どもと家庭の厳しい現実を見据え 未来を守る心理援助の担い手を育てる

●人間科学部 心理・行動科学科
若佐 美奈子 准教授―― *WAKASA Minako*

Psychoanalytically Oriented Psychotherapy

貧困、虐待など、子どもたちを取り巻く環境が抱える課題は大きくなっている。現在の日本のこの状況に対して、若佐美奈子准教授は、心理学が果たすべき役割とは何かを問い、豊富な精神分析的心理療法の実践から得た臨床現場の知を活かし、臨床心理の専門家の育成に取り組んでいる。

■分野を横断して臨床・研究 精神分析の視点を幅広く活かす

――若佐先生のご専門は、精神分析学・臨床心理学でしょうか？

はい、なかでも、現代クライン派精神分析を専門にしています。精神分析は、20世紀のはじめにジークムント・フロイトが生み出したもので、そこから考え方が少しずつ異なるいくつかの流派に分かれました。現代クライン派は、フロイトの後継者の1人で、児童の分析を多く手掛けたメラニー・クラインの理論から発展したもので、イギリスで実践・研究が活発です。

――大学でのご研究、教育以外に臨床の現場での仕事の経験も豊富ですね。

児童相談所で発達相談などを行う心理判定員、児童養護施設の心理職員、中学・高校のスクールカウンセラー、総合病院の精神神経科やこども心療外来に心理士として勤めた他、教員、学校職員、病院職員など各分野の専門家へのコンサルテーションも行い、精神分析的心理療法を実践してきました。

――活動分野が本当に幅広い。

精神分析の視点は、さまざまな分野の臨床現場での応用が可能だと思います。日本の医療領域で今、最も主流となっているのは、認知行動療法といって、認知や行動を変えていこうというものです。対して、精神分析的心理療法は、基本的に無意識を想定してお会いするやり方で、言葉にならない、目に見えない、本人も気づいてないような心の傷や、抑圧して気づかないようにしている記憶などを中心に探索していく方法です。

たとえば、お子さんの言葉の発達が遅いからと発達相談に来られたお母さんがいるとします。そのお母さんに「ことばの教室へ行かれては」と提案しても、「はい」とは言うけれど、実際には行かれないことがあります。よく話を聴いていくと、自分が子どものときに、親に愛情深く育ててもらっていなくて、心の底に怒りがあることに気づかれたりします。このような、援助を求めているにもかかわらず、反発したり、自分の気持ちがつかみにくかったりする方などには、精神分析の方法は向いていると思います。精神分析的心理療法は心の深奥に触れる方法、言い換えれば、本質的な部分でその方自身を知っていく方法だといえます。

同じ子育ての相談であっても、認知行動療法が向いている方もいますし、助言や寄り添うサポートが合っている場合もあります。ですから、初めてお会いしたときに、この方がどんな治療法に向いているのかを考えるためのアセスメントが重要になってきます。

■寄り添って、悲しみを乗り越えたときの達成感

――カウンセリング、精神分析は具体的にどのようにするのですか？

週一回、1回50分、1年以上来ていただくことが基本です。クライエントと1対1でお話をお聞きしますが、誘導しないように聴くのが、心理療法では一般的です。苦しいことを打ち明けるのは、とてもたいへんですから、お話ができるまで、待ち続けるのも大切な時間です。

相談内容は、子育てや対人関係の悩み、不登校、引きこもり、DVなど多岐にわたります。その方が何を相談したいのか、何に苦しんでいるのかによりますが、少なくとも痛みや悲しみを抱えてなんとか生きて行けるまで、ゆっくりと取り組みます。長いときには、10年ぐらいかかることもあります。

――臨床活動をするときに、心がけていることはありますか？

その方の力を信じることです。「打ちひしがれて、もう立ち直れない」、「悲しくて生きていられない」とおっしゃっても、その方の苦しみや悲しみを想像し、共鳴しながらも、そこに居続けるよう努めています。

精神分析的心理療法の特徴の1つは、心理士が一方的に分析して話すのではなく、心理士とクライエントの関係性を大切にして、「今ここで」感じる気持ちを考えていくことなんです。

――臨床心理のお仕事のやりがいは？

それはやっぱり人と深く関われるということだと思います。クライエントが深い悲しみや苦しみと向き合い、真に乗り越えることができたときには、本当にやっていて良かったと思います。

■浮上まで、時間をかけて苦しみの深海に一緒にとどまる

――大きなやりがいを感じた事例を何か教えていただけますか？

具体的なケースをお話しするのはむずかしいですが、何人かの方が公開しても構わないとおっしゃってくださっていて、その中から一例を上げると……

▼臨床心理の専門家として

私は相手のこころをコントロールしたり、導いたりせず、
ともにその苦しみの中にとどまり続けようと努めます。
それが私のプロフェッショナルとしての仕事です。

▼教育者として

マイノリティを大事にできない社会は不健全ではないでしょうか？
いろいろな立場の方をこまやかに見られる、
そういう心理士さんを育てていきたいと思っています。

お子さんを自死で亡くされたお母さんがおられました。相談に来られた当時はうつ状態で、ごはんも食べられないし、外にも出られない。「あの時こうしていれば……」、「この言葉が良くなかったのか」と、ひとりでずっと悔やんでおられました。同じような境遇の方々の自助グループにも行かれたけれど、本当の意味でわかり合えないとお感じになった。そういうケースを担当したことがあります。

お子さんは遺書を残されていたんですけど、つらくて読むことができなくて、家族のために後を追うのをなんとか思い留まっていらっしゃった。最初は心理療法にも懐疑的で、ここに来ても何も変わらないだろう、と口にされていました。

何も変わらないというのは、その通りかもしれません。大切なお子さんの命は戻りませんし、彼女自身が人生をやり直すこともできない。私は励ますことはしません。多くの人が元気を出して、と励まされて、苦しむからです。どのようなお子さんだったか、彼女が今どんな思いなのかを聞き続けるのです。

光の届かない、何も見えない深海の中に一緒に沈んでいくような感じでした。その方は夢をたくさん見られました。そのイメージの世界に深く沈み込んでいって、新たなお子さん像を発見したり、思い出されたりすることもあり、彼女は少しずつ、日々の穏やかな生活に戻り、親子の関係を振り返る余裕を取り戻していきました。

そんな中、ある日、割れたお皿を金継ぎで美しく修復するテレビ番組をご覧になって、こころに響くものをお感じになったようでした。彼女はご自身のこころが割れ、欠けてしまって元に戻らないことを受け入れ、金継ぎのように、痛みを抱えて生きていくことを決心されました。

その時、罪悪感、申し訳なさがあまりに大きく、悲しみを十分に悲しめなかった彼女が、心から悼んで涙されました。深海から浅瀬まで必死に泳ぎ切ったように、とても疲れておられましたが、うつに戻らない安定感を身につけられました。そして、趣味を生かした仕事を徐々にされていくようになりました。3年ぐらいはかかったと思います。それでも早い方ですね。

私はクライエントの気持ちに寄り添って、一緒に言葉にはしていきましたけれど、意図的または計画的に何かしたということはありません。私は相手のこころをコントロールしたり、導いたりせず、ともにその苦しみの中にとどまり続けようと努めます。それが私のプロフェッショナルとしての仕事です。

■臨床と教育は支え合う両輪 見落とされがちなものこそ大切に

——臨床と教育はどのようなバランスでされているのでしょうか？

臨床経験は、教育に役立ちます。多彩なケースを日常的にやっていること、自分自身も臨床から学び続けていることが、教育にとっても大事で、臨床と教育は両輪だと思っています。

——教育では、学生による授業評価アンケートから、2019年度「学生が選んだベストティーチャー」に、心理・行動科学科で選出されましたね。

ありがとうございます。わかりやすく、そして学生のこころに響くような授業にしようと思っています。臨床も教育も、どちらも相互交流を大切にしています。

——精神分析研究室を志望するのは、どんな学生が多いのですか？

私のゼミに入ってくれるのは、やはり公認心理師や臨床心理士を目指している学生が多いです。虐待、不登校、いじめなど社会的な問題に関心がある真面目な学生が多い。障害を持っている子どもの兄弟・姉妹のケアをテーマにしているゼミ生もいます。障害を持つ子本人やその親に目が向けられがちですが、兄弟に着目することは私も重要だと思います。マイノリティを大事にできない社会は不健全ではないでしょうか？ いろいろな立場の方をこまやかに見られる、そういう心理士さんを育てていきたいと思っています。

——先生ご自身の研究で、多くの方が扱うのではないテーマに着目したものはありますか？

たとえば、離婚家庭における子どもの心理、親に対するサポートは私の研究しているテーマの1つです。離婚家庭のセラピーはアメリカではメジャーですが、日本ではまだまだです。日本の離婚制度では子どもの親権は共同親権ではなく、どちら片方だけが持つことになります。親権がない親が子どもとどう関わっていくかは、大きな問題です。この問題を含めて、研究を続けています。

■母親を援助する研究を中心に 子どもの虐待のない社会を

——今後の抱負をお聞かせください。

研究では、母親を援助する研究をメインにしていきたいと思っています。子どもを育てることが、むずかしい世の中になってきています。子どもに愛情をかけたいけれど、経済的にしんどい、その他の家庭の問題があって、それどころではないという家庭もあれば、お金はあっても、子どもと触れ合うのを避け、塾や習い事にたくさん通わせ、しつけすら外注してしまう親御さんもいます。どちらも、子育てが苦しいのだと思います。

私が精神分析を勉強したのは、母親に虐待された子どものセラピーを児童養護施設で体験したことがきっかけでした。優しく愛情をかけるだけでは太刀打ちできず、「お母さんのことが憎いけど、愛してる」とか、「何で自分を捨てたんだ」という怒りが、子どもたちのこころの中からすごい勢いで噴き出してきました。そういったこころの底の方に沈んでいるものを扱えたのが、精神分析の方法だったんです。

そして、このように重篤な状態になる前の予防が大切で、そのために親たちをサポートしていきたいと思ったわけです。虐待について、「親が悪い」として片付けてしまうことは、本質的な問題解決になりません。

虐待もDVも増えています。弱者にしわ寄せが行く、社会の構造の問題もあるかもしれません。子どもは家庭の中や、学校・国の中で、逃げ場がないことがほとんどです。他者を信じたり頼ったりすること、新しいことを学び、力をつけていくこと、安心して遊ぶことに夢中になれること、こういった当たり前のことができるように、社会の中で子どもに関心を持ち、こころを寄せる大人を増やしていきたいと思います。

本学の学生を優れた心理士さんに育てていくことも、そこにつながるだろうと思っています。熱意を持って取り組んでいきます。

また、司法や福祉をはじめ、別の領域の援助者の方々に精神分析の視点を役立てていただく方法についても研究を進め、東京大学の「職域・地域架橋型―価値に基づく支援者養成」のプログラムに参加しています。幅広い現場に活かせる知見を見つけ出せるようがんばりたいと思います。

■**若佐美奈子**（わかさ・みなこ）――人間科学部心理・行動科学科准教授（精神分析研究室）。大阪大学大学院人間科学研究科臨床心理学専攻博士後期課程単位取得退学。千里金蘭大学人間社会学部（現代社会学部）専任講師、准教授を経て、京都大学大学院教育学研究科臨床教育学専攻博士後期課程を修了し、教育学博士号を取得。大阪大学大学院連合小児発達学研究科子どものこころの分子統御機構研究センター特任准教授を経て、現職。西天満心理療法オフィス代表。著書に『心理療法における無意識的空想』金剛出版がある。

誰もが地域の中で安心して暮らせるように

── 患者と取り巻く人々の“繋ぎ役”を担う ──

身体の不調だけでなく、心に病を抱える人が増えている現代社会。精神保健福祉士とは、こうした人々がスムーズに生活を営めるよう、相談や助言、訓練、社会参加、環境調整などを行うソーシャルワーカー。兵庫県の精神保健福祉相談員として精神科医療の基幹病院に入職した小西佐和さんは、患者とご家族、院内スタッフ、地域社会、外部機関等を繋ぐ架け橋となって、日々奮闘している。

●精神保健福祉相談員
小西 佐和 さん── *KONISHI Sawa*

◀兵庫県立ひょうごこころの医療センター

■**小西佐和**(こにし・さわ)
2016年 文学部 総合文化学科卒業。在学中に精神保健福祉士養成課程を経て国家資格を取得。同年 兵庫県立ひょうごこころの医療センター 地域医療連携部に入職。現在は児童・思春期病棟を担当し、入院患者の退院支援や外来患者の地域生活のサポートを行う。

●〝いなくても大丈夫な存在〟に

「病院の相談員は、患者さんにとって〝絶対に必要な存在〟になってはいけないと思うんです」。ひょうごこころの医療センターの地域医療連携部で入院患者の退院支援や外来患者の地域生活をサポートする小西さん。入職当初からの4年間は慢性期病棟を、昨年4月からは児童・思春期病棟を担当し、現在は小学生から20歳までの入院患者や外来患者を受け持つ。「患者さんは医師に薬の調整をしてもらいながら、院内学級や集団療法、レクリエーション等を通してコミュニケーションの練習や、様々な体験を積み重ね、心身の健康を取り戻していきます。それをサポートしつつ院内スタッフやご家族、外部機関と連携をとり、患者さんが家庭や学校、地域での生活を送れるよう一緒に考えるのが私の仕事です」。業務内容は多岐に渡り、患者の生活に深く関わる。慢性期病棟を担当していた頃は、一緒に年金や生活保護の計算をしたり、生活費を貯める計画を立てたり、住居探しや引越しの手伝いに行ったこともだからこそ、意識するのは相手との距離。「私は他者との繋ぎ役。その人のことを考えると、私だけでなく様々な人と関係を構築できた方がいいですから」。退院後に、そういえばこんな人いたな、話を聞いてもらえてよかったな……程度に思い出してもらえれば十分と、小西さんは微笑む。

●退院に向けて、粘り強くサポート

精神科病院の歴史を遡ると、かつては患者を隔離したり、閉鎖的な空間で一生を預かったりする社会的入院が多く見られた。時代が変わり、今は病状が悪い時は入院し、良くなったら地域社会で暮らすのが本来の姿とされるようになった。しかし、長期の入院により生活能力が落ち、地域に戻ることが怖くなってしまった人も多いという。小西さんも入院生活20年の患者を2年間サポートし、地域生活へと送り出した経験がある。「当初は意思の疎通も図れず、頷く程度の反応だった患者さんが、徐々に話をしてくれるようになり、食べたい物などを伝えてくれるようになり、地域で生活したいと言ってくれるようになりました。本当に退院するのがいいことなのか悩むこともあったけど、地域で楽しく生活を送っていると報告をもらい、間違いではなかったと思うことが出来ました」。料理も洗濯も薬の管理もできないまま、看護師のいない環境で生活するのは大変なことだ。ご家族から退院を反対されるケースもあり、院内スタッフも立場によって賛否が分かれる。「皆が同じ方向を向いて協力しないと支援はうまくいかないことを学びました。だから、理解を得られるまで何度も何度も説明する。粘り強く、根気強くやることが大切ですね」。

●〝地域と繋がる〟支援がしたい

小西さんが社会福祉士の存在を知ったのは、小学生の頃、読書感想文を書くために選んだ本『〝it(それ)〟と呼ばれた子』(Dave Pelzer著)からだった。それは虐待の実話であり、ソーシャルワーカーが登場した。「当時の印象は、横文字の格好いい職業(笑)。その後、進路を考える際、資格を取って手に職をという母の教えもあって、精神保健福祉士養成課程のある神戸女学院大学のオープンキャンパスに参加しました」。興味のある授業がたくさんあり、絵本の中にいるかのような環境にも惹かれて、迷わず入学を決めたという。

本気で現職に就く決心をしたのは、実習で患者の自宅訪問をした時のこと。「これからどのように地域生活を送っていこうか? と、一緒に計画するのが楽しく、やりがいを感じたんです」。元来、あれこれ計画を立てて旅行するのが好き。旅先では観光スポットよりスーパーや公園に足を運び、その地域の生活に触れることを楽しむ。また、震災後の仙台へ行き、地域の祭りやセルフビルドの手伝いにも参加していた。地域と繋がることやその支援は、当時から、知らず知らず小西さんの原動力になっていた。

●院内外のネットワークを広げる

病院では年2回、地域交流と周知を兼ねたお祭りを開催しており、小西さんはその実行委員も務める。昨年の開催は見送られたが、以前は、依頼した劇団に女学院の先輩が所属していたご縁から、一緒に舞台を作ったことも。今はそうした外部との交流を広げながら、院内活動にも力を入れている。「自分の得意なことを生かし、毎朝15分、子ども達にヨガやストレッチを教えたり、音楽が好きな患者さんとピアノを弾く時間を設けたりしています」。

今後の抱負を尋ねると「他機関での仕事も経験したい」と返ってきた。県の相談員の配置先は、病院だけでなく、本庁や精神保健福祉センター等もある。「大学で学んだ法律の話や支援の在り方も、こういうことか! と、今なら理解できる。勉強もし直したいし、違う視点で精神科医療や精神保健に触れることで、比較や判断が出来るようになりたいです」。

私は他者との繋ぎ役。その人のことを考えると、
私だけでなく様々な人と関係を構築できた方がいいですから。
退院後に、そういえばこんな人いたな、
話を聞いてもらえてよかったな……程度に思い出してもらえれば十分

新型コロナウイルス感染拡大に対応した授業運営について

健康・安全を最優先課題としながら、教育の質を保つ

●副学長・教務部長
立石 浩一 教授―― TATEISHI Koichi

▲オンラインによる遠隔授業

新型コロナウイルスの感染拡大という、
誰も予想できなかった緊急事態に、
世界中が見舞われた2020年度。
本来の大学教育の提供が困難な状況の中で、
本学がどのように授業を提供してきたか、
立石浩一副学長・教務部長が
これまでの対応を整理概括し、
今後の対応・展望についても言及した。

◉安全配慮を第一優先に

――新型コロナ感染拡大が始まってからこれまで、授業運営についてどのように対応してきたのでしょうか？

国の大学設置基準によって、大学は、教育サービス、安全配慮、適切な校地、の3つを学生に提供することを義務付けられています。2020年2月頃から、本学ではこの3つの義務のバランスを、どのようにとっていくかについての討議を始めました。

そして、この事態の中では、安全配慮を第一に優先すると考え、4月半ばには授業をオンラインによる遠隔で行うと決め、6月半ばまでは、ほぼ全面的に遠隔で授業を行いました。ただし、その後、音楽のレッスン、資格に関わる実習、実験を伴う授業など、どうしても対面でなければできない、あるいは教育効果が得られない授業に限って、特に卒業を控えた学年を中心に、対面授業を再開しました。

後期は、原則として前期の方針を踏襲しつつ、資格に必須な授業、実験・実習については対面授業を増やしました。

――遠隔授業は、具体的にどのような形で行われたのですか？

7年ほど前に導入したオンライン教育システムのMoodleをベースに、Zoomを組み合わせて行った授業が多くなっています。教員、学生の支援をするために、情報処理センターおよび視聴覚センターの職員の方にご努力いただいて、遠隔授業サポート室も開設しました。

大学の授業は性質も目的も多様で、一概にこういう形式で授業をしなさいということはできません。ですから、先生方がそれぞれに創意工夫されていた、というのが本学の状況でした。

学生は経済状態、居住環境も一人ひとり違います。パソコンやモバイルWi-Fiルーターの貸与なども行いましたが、全員が理想的な通信環境で、オンライン授業を受けるところまでは行けませんでした。

ほとんどの学生がパソコンを所持していますが、Wi-Fi環境が不十分だったり、ネットに繋ぐのはパソコンではなくスマホだけとか、本当にいろいろです。先生方には、学生の間で不公平が生まれないように、授業の前に学生の通信環境の確認をお願いしていました。

◉対面を増やしつつ、遠隔も継続

――遠隔授業中心になったことに対して、学生、教員の反応は？

先生からすると、学生がちゃんと習得できているかどうかの手応えを、オンラインではなかなか感じることができない。ということで、当初は、成果を確認するために課題を出し過ぎ、学生はこなすのがたいへん、教員も採点するのがたいへんと、双方が負担増を感じることがあったように思います。

前期、後期のそれぞれの終わりには、学生にアンケートをとりました。前期は、オンラインでは、先生の意図がわかりづらいなどの不満もいくつかありましたが、後期になると落ち着いてきて、むしろオンラインの方がいい授業があるといった感想も出てきました。

たとえば、先生が用意した資料・動画を、学生が授業の前にオンデマンドで見るというやり方の場合、教室での授業と違って、自分の都合のいい時間に自由に繰り返し見られるのがいいと述べる学生がいました。

――1年経過して、鮮明になった課題などありますか？

キャンパスの校地を学生に開放するのは、大学の義務の1つですので、それを、できるだけ安全な形でどう実現していくか、この先、当分はその課題が重くのしかかってくると思っています。

この1年間でいちばんたいへんだったのはやはり、入学してすぐにオンラインになった新入生だと思います。数が多いわけではないですけれども、新しい環境になじめずに、大学から遠ざかったり、オンライン授業を受ける準備が整わなくて、十分に授業を受けられなかった学生もいます。そういった学生の教育をどのように取り戻し、ケアしていくのかを考えていかないといけないと思っています。

――本年度の授業はどのように実施していきますか？

前年度後期は、対面授業で登校する学生は、資格に関わる授業に出る学生と心理・行動科学科、環境・バイオサイエンス学科の3、4年生、そして音楽学科のほぼ全学生という状況でした。これを全学部学科に広げ、対面授業の割合をかなり増やしていく予定です。

ただ授業の種類によって、たとえばマスクを外しての発音チェックが必要な外国語授業など、感染リスクの高い授業は遠隔のままにします。また、50人以上の大人数の授業はやはり遠隔で行うことになります。

◉新型コロナで見えた大学の可能性

――大学の授業は、新型コロナの感染状況が落ち着けば元に戻るのでしょうか？

これが過ぎたらオンライン授業がなくなるかといえば、多分そうではないだろうと思っています。

今、まさに抱えている問題として、留学予定の学生がほとんど行けていないことがあります。状況の整理が進んだ今やっと、海外の大学の授業を、国内にいながら受ける、バーチャル留学みたいなことができないかという検討を始めています。また、オンラインを利用すれば、社会人に対して、もっと教育の機会を提供できるのではないか、ということも考えられます。

こういったオンライン教育の可能性は、どの大学もこれから先考えていかざるを得ないかな、と思っています。

――最後に学生、保護者の方々へ、メッセージをお願いします。

昨年度1年間は学生、保護者のみなさんにとっても、我々にとっても、たいへん厳しい、苦しい1年でした。その中で、いきなりオンライン授業が始まって、ご不便をおかけしました。それについてご意見のある方もいらっしゃるかと思います。大学もいろいろ問題があることは当然把握しています。徐々にではありますが、キャンパスを学生に開放して参ります。感染状況次第ということはありますが、できる限り学生のみなさんが普通にキャンパスに来ていただける状況を作る努力をさせていただくことをお約束します。

▲音楽学部の定期演奏会はコーラス用のマスクをつけて実施した

本学ウインドオーケストラが世界的作曲家の新譜・初演曲を含むファーストCDをリリース

●音楽学部
松浦 修 准教授―― *MATSUURA Osamu*
八木澤 教司 専任講師―― *YAGISAWA Satoshi*
稲本 渡 専任講師―― *INAMOTO Wataru*

●「神戸女学院大学音楽学部ウインドオーケストラ」(全11曲)
6月上旬、ワコーレコードより発売。講師陣の独奏や、コロナをモチーフに作られた新譜、さらに神戸女学院記念歌「Beauty Becomes a College」など、魅力的な楽曲を多数収録。

音楽学部で2019年に新設されたウインドオーケストラが、今年6月に初となるCDをリリースする。大手出版社ハル・レオナード・ヨーロッパとのタイアップにより、世界的に著名な作曲家の新譜と日本初演権の提供が実現し、録音されたその楽曲は、ヨーロッパやアメリカ、日本、アジア諸国へと流通されることとなった。今回、記念すべきCD作成に尽力された音楽学部の先生方にその意気込みを聞いた。

レコーディングに向けた最終リハーサルの様子▶

前例のないレコーディングCDを

本学が音楽学部の新規授業科目としてウインドオーケストラを立ち上げたのは、今から2年前。指導陣には学生にとって単に演奏会を行うだけのものではなく、やりがいのあるプロジェクトのなかで有意義な経験をさせられるものにしたい、という想いがあったという。そのなかから生まれた計画のひとつが、CDのリリースだった。もちろん音楽大学発信のCDは他にも事例が多く、珍しいことではない。「せっかくなら、従来の吹奏楽曲を収録するだけでなく、新譜を本学から発信し吹奏楽レパートリーの開発をしよう!」とは、八木澤専任講師からの提案。さらにかねてより作曲家として契約している世界的出版社のハル・レオナードに本学ウインドオーケストラを紹介、SNSにアップした演奏が作曲家たちからも好評だったことが後押しとなり、新譜の楽譜と日本初演権を提供するという異例な申し出もスムーズに決まった。

学生にとって貴重かつ有意義な経験

通常はすでに録音・演奏されたことがある曲を演奏することが多いが、今回提供された新譜の初演とは録音されたものがまったくない状態。「楽譜からの情報しかないというのは、ゴールが見えづらい状態です。学生も切磋琢磨しながら少しずつ楽譜を読み解いていきました」と話すのは松浦准教授。今回、演奏者として参加した稲本専任講師は「新譜にはお手本とする演奏が存在しない。そのなかで、どう演奏していくかをみんなでまとめていけたのが、非常に大きな収穫。学生が大きく成長できたポイントだと思いますね」。プロの音楽業界で行われている厳しいレコーディング作業を体験したのも、学生には今後の糧となる貴重な経験となった。

松浦 修 准教授

八木澤 教司 専任講師

稲本 渡 専任講師

吹奏楽界の未来へ貢献できるバンドに

学生が在学中に一度は参加できるよう、今後もう年に1枚程度のペースでリリースを継続できたら……という展望もある。「授業を越えてレコーディングのセッションを経験するというのは、音楽業界の実現場を経験できる有意義な機会です」(松浦准教授)。コロナの影響で2月から延期になっていたリリース記念特別演奏会も、ようやく9月に開催が決定。今回のCD音源製作をきっかけに、海外の作曲家から作品集のCDを作ってほしい、といったオファーも既に受けている。「発信したものにフィードバックがあるというのは、とても嬉しいことです。『自分たちのCDができてよかった』で終わりではなく、このプロジェクトが、これからの世代へ向けての目標となる存在になれたらいい。日本と世界の吹奏楽界に貢献していければと思います」(八木澤専任講師)。

● 演奏会情報
【日 時】2021年9月23日(祝)
15：00～
【場 所】エミリー・ホワイト・スミス記念講堂
※ 参加申込詳細は音楽学部ホームページを参照

女学院公式YouTubeチャンネルで
日本初演音源を公開!

「音楽によるアウトリーチ」を発展させた民間企業との産学連携協定を締結

▲2020年2月27日、大学内において協定書調印式が行われた

2020年2月、スミリンケアライフ株式会社と本学が産学連携協定を締結した。老人ホームや在宅介護サービスの企画・運営を行う同社が新しくオープンしたサービス付き高齢者住宅「エレガーノ西宮」がその舞台。入居者のQOLを高めるため、学生たちはどのようなことに挑戦していくのか、音楽学部では珍しい産学連携とはどのようなものか、松浦准教授に話を聞いた。

●音楽学部
松浦 修 准教授

――産学連携に至ったきっかけは?

社会福祉学がご専門の本学教授を介して、「新しくオープンする高齢者入居施設で、音楽を通じて入居者のためになることがしたい」という同社からのご相談がきっかけでした。もともと音楽学部は、津上智実教授を中心に小中学校や病院等に学生が赴いて演奏活動を行う、「音楽によるアウトリーチ」を2001年から展開してきました。その土台を生かし、地元西宮市の高齢者福祉・人材育成・芸術文化の発展に寄与する取り組みを実現できればと思いました。

――協定の内容を教えてください。

協定書で決めた年度予定は、学生によるコンサートが6回、七夕もしくはクリスマスに行う卒業生によるコンサートが1回、あと教員による音楽に関する講演会が1回、になります。先生方と何度も検討を重ね、回数や内容もしっかりとボリューム感をもたせました。コンスタントに学生が出向いていけるよう、組み立てています。

――協定を結び、定期的に演奏会を行うメリットとは?

エレガーノ西宮という固定の場所で長期的に音楽プログラムを展開していくことが可能となります。キャンパスを離れて、学生が実社会と繋がることのできる貴重なインターンシップの場になると思っています。単に演奏が出来るだけでは、将来、音楽で身を立てていくのは大変です。人や社会のために音楽で何ができるのか、ニーズに合わせたものを自分で考え工夫し提供するという感覚は、在学中に育てておかないといけません。実際に自分たちでプログラムを考え、そのための練習もして、トーク内容や会場の飾りつけも学生自らが考える。もちろん我々も指導しますが、ベースはすべて学生たちが考えて組み立てます。長期的にこういう場が与えられるというのは、我々が教育をしていくうえでも、とてもありがたいことだと思いますし、学生にとっても大きな学びになると思います。

――昨年度の成果を教えてください。

協定を結んだのが2020年の2月。昨年度は協定書の内容で演奏会をシリーズで行う予定だったのですが、先方が高齢者施設ということもあり、世情の関係で実際に公演を行うことができたのは12月19日のクリスマスコンサート1回だけになってしまいました。入居者の方たちとクリスマスキャロルを歌う予定でしたが、歌わずに聞いて楽しんでいただけるように急遽、弦楽合奏版に編曲しました。入居者の方も生演奏を聴くという機会がとても貴重だったようで、「気持ちよくクリスマスを過ごすことができた」、「良いクリスマスを迎えられた」と、とても喜んでくださいました。

――学生の反応はどうでしたか?

学生のなかでも、やりがいのあることができた! という達成感を感じていたようですね。僕らが常に大事だと思っている〝現場で、自分たちの力でやり遂げる〟という体験をして、そのやりがい、難しさも感じたと思います。一人ひとりが主体的にしっかり準備して、現場へ届けるという責任をしっかりと感じられていた様子だったので、ほんとに良い機会になったと思います。

▲「エレガーノ西宮」で開催されたクリスマスコンサート

――今後の展望をお聞かせください。

まず今年度は、予定通りに演奏会をすべて開催したいです。そして将来的には同系列にも多くの高齢者住宅があるとお聞きしているので、より多くの方々に学生たちの音楽を届けていけたらいいなと思っています。学生たちの音楽とやる気で、さらなる社会貢献ができる可能性はまだまだあると思いますから。今回の産学連携協定が、その第一歩となれば嬉しいですね。

KC TOPICS

第138回卒業式が行われました

「学長のことば」を述べる斉藤言子学長（当時）

卒業生代表による答辞

3月18日（木）、第138回卒業式が行われ、学部生624名・大学院生25名が本学を卒業・修了しました。

今年は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、参列者を限定（卒業生と教職員のみ）するとともに、密集防止のために3回に分けて執り行われました。〈※1〉

本来であれば、卒業生・修了生全員に一人ずつ学長より学位記が手渡されますが、今回は新型コロナウイルス感染症拡大のために、各学科・研究科の代表に学位記が手渡されました。

2021年度入学式が行われました

▲（左）「学長のことば」を述べる中野敬一学長　（右）新入生代表による宣誓

4月5日（月）、2021年度入学式が行われ、479名の新入生を迎えました。

入学式としては2年ぶりの挙行となり、満開の桜のもとに新入生を迎えたキャンパスは、新年度にふさわしい賑わいを取り戻しました。なお、今回の入学式は新型コロナウイルス感染症拡大防止のために、参列者を限定（新入生と教職員のみ）するとともに、密集防止のために3回に分けて執り行われました。〈※1〉

〈※1〉式典の模様は、保護者の皆様や関係者の皆様にご覧いただけるようライブ中継およびオンデマンド配信を行いました。

中野敬一学長が就任しました

4月1日（木）、第17代学長に中野敬一総合文化学科教授が就任し、スーザン・A・ソール記念礼拝堂にて就任式が行われました。中野学長の任期は、2021年4月1日～2024年3月31日です。

飯謙理事長・院長（左）から辞令交付を受ける中野敬一学長

▲中野敬一学長

2021年度前期授業開始

▲学生証をかざして検温（正門）

▼新入生向けITオリエンテーション

4月12日（月）より、今年度前期の授業が始まっています。

昨年度に比べて、今年度前期は対面授業を大幅に増やしていますが、授業の実施にあたっては、十分に感染対策をとっています。学生の入構は正門と西門に限定し、学生は専用端末に学生証をかざし、検温を行った上で入構することになっています。

学生が戻ってきたキャンパス内は、大学らしい雰囲気を取り戻しています。〈※2〉

〈※2〉その後、緊急事態宣言の発令に伴い、対面授業の実施に制限が生じました。

神戸女学院創立150周年記念ロゴマークが決定しました

本学院創立145周年となる2020年10月12日（月）、創立150周年に向けたメッセージ"Bridging Generations"を発信しました。あわせて学生生徒、卒業生および教職員を対象に記念ロゴマークの募集を開始しました。応募作品の中から「メッセージの内容との整合性」「未来に向けた躍動感」「神戸女学院らしさ」を基準として選考しロゴマークが決定しました。今後、2025年に向けて「神戸女学院150周年」をアピールしていきます。

150th Bridging Generations
150Years of Excellence in Women's Education
未来を生きる人たちのために。

▲創立150周年記念ロゴマーク

新たなWEBメディアを立ち上げました

神戸女学院大学の学びの魅力を発信するオウンドメディア〈※〉「わからないから、おもしろい。」をオープンいたしました。生涯にわたって知的好奇心をもち、人生を豊かにするために学び続けたい。そんな思いをもつ女性のためのメディアです。さまざまな視点から、教員の研究・活動、卒業生のいま、学生の活動や取り組みなどを発信していきます（毎月1本程度の記事を掲載する予定です）。

〈※オウンドメディアとは〉……「自社・大学等で保有するメディア」の総称のことです。主に自社・大学等で運営・情報発信を行うWEBマガジンを指すことが多く、こちらのメディアもWEBマガジンとなります。

● 本誌へのご意見、お問い合わせ：神戸女学院大学広報委員会　〒662-8505 兵庫県西宮市岡田山4-1／E-mail　kckoho@mail.kobe-c.ac.jp
● 取材に際しては、感染予防策を最大限に講じた上で実施いたしました。

●神戸女学院大学広報委員会　〒662-8505 兵庫県西宮市岡田山4-1
●E-mail　kckoho@mail.kobe-c.ac.jp　https://www.kobe-c.ac.jp/
神戸女学院大学